

昨日読んだ文庫

杉江松恋

校正という言葉を書くたびに思い出す小説がある。小林信彦『唐獅子株式会社』（新潮文庫）だ。主人公の△私△は、広域暴力団・須磨組の構成員だ。彼の懲役中に、古巣が妙なことになる。須磨組の大親分が突如近代化に目覚め「唐獅子通信」なるタウン紙の刊行を始めたのだ。出所した△私△があき返って組の事務所を眺めていると、若僧が飛び込んでくる。

「校正、できましたか？」
△私△は激怒し、若僧の股間を蹴り上げた。

「わしの更生は、わしが考えるわい」

コウセイ違いなのである。

ああ、この呼吸。『唐獅子株式会社』は十話の短篇から成る連作小説だ。小林はその

第一作を「筋の細部や落ちを前もって作らずに、喜劇的想像力に連鎖反応をおこさせ、短距離の暴走をさせ」という実験のために書いた。そうした作品は、一九七七年の発表当時、日本には存在していなかったのである。この原稿を書くために私は何年ぶりか



に文庫本のページを開いたが、初めて読んだときと同じように大笑いさせられることになった。他人に影響されやすい大親分と、それに振り回されるヤクザたち、という構図のおかしさは永遠だ。

本書は日本を代表するパロディ小説の傑作でもある。須

磨組というヤクザ組織を用いて世情を描くという趣向が大枠としてあり、各話がそれぞれ当時の流行りもののパロディになっている。たとえば『唐獅子惑星戦争』は、大親分が映画「スター・ウォーズ」に影響され「宇宙意識」に目覚めてしまうという話だ。「宇宙におるのはわしらだけやない」と言い出した大親分は、抗争を「接近遭遇」と呼びかえるように配下の者に厳命するのである（どちらも元ネタは映画「未知との遭遇」）。こうした具合の小ネタも満載で、たいへん密度が高い。

本文庫が刊行されてから、約三十年の歳月が経過した。その間に日本は、ますます奇妙な国になった気がする。日本本の「大親分」におかしな言動で国民を振り回す癖があるのは、もしかすると『唐獅子株式会社』に影響されたのではないだろうか。（書評家）